

日常事態における社会的比較の様態

高田 利武*

Some Aspects of Social Comparison in Everyday Life

Toshitake TAKATA

要 旨

日常事態における社会的比較の実相を把握するべく、自由記述（研究Ⅰ：大学生）と多項目選択質問紙（研究Ⅱ：成人）を通じて、日常生活における社会的比較の頻度と様態（比較の対象、比較の相手、比較の理由・機能）についての調査を実施した。大学生の比較頻度は成人より多かったが、両者とも総じて高いレベルにあった。また、両者に共通して他者指向的な比較の機能が見出された。さらに、比較の過程に影響を及ぼす公的自己意識やコンピテンス等のパーソナリティ要因が見出された。これらの結果に対し、他者を参照して自己を認識するメカニズムとして社会的比較を位置づける観点（高田，1992）から考察が加えられた。

問 題

日常生活の中で、何かにつけ自分と他者とを比較することは極めて普通に見られることである。我々はなぜ自他の比較を行なうのであろうか。また、何をどのような他者と比較するのであろうか。このような疑問に対して、従来、一定の回答を与えてきたのはFestinger (1954)の社会的比較過程理論であった。

社会的比較過程理論の基本仮定は、(1)人間には自分の意見や能力を評価しようとする動機がある、(2)評価のための客観的手段が使えない場合は、自分の意見や能力を他者と比較することによって自己評価しようとする、(3)比較する相手には自分と類似した他者が選ばれやすい、の3点からなる。これに従えば、我々は日頃、意見や能力を自分と類似した者との間に自己評価のために比較している、ということになる。

Festingerの理論の刊後40年近くが経過し、その間それに立脚した多くの研究が生まれ、理論の大枠を支持する実証的知見も多く報告されている。しかしながら、理論の基本的仮定には当初から疑問や批判もあり（Deutsch & Krauss, 1965）、就中Guiot (1978)は、社会的行為の中に普遍的に見られる自他の比較という現象が極めて限定された角度からしか扱われていない、と断じている。

さらに、近年における研究の進展は、自他の比較に関する新たな分析視角の提唱（Wills, 1981; Tesser & Campbell, 1983）、その発達の検討（Ruble & Frey, 1987）、あるいはそ

の目標に関する理論的展開 (Wood & Taylor, 1991) を生み出し、Festinger理論の総体的観点の再検討の必要性が示唆されている。同時に、社会的比較過程理論の枠組みにとらわれずに自他の比較の過程を総合的に捉え直すためには、このような理論的あるいは実験的検討もさることながら、日常生活場面における社会的比較の実態を探る必要がある。

わが国における社会的比較の日常様態を示唆する興味深い一例として、富国生命 (1991) による資料がある。首都圏のサラリーマン500名を対象としたこの調査によれば、「つい人と比較してしまうこと」として、年収、仕事の成果、地位、学歴、会社、住まい、健康状態等の頻度が高いことが報告されている。しかしながら、そのような比較の背後にある動機については不詳である。僅かに、「人並み・人と同じが好き」と答えた者 (34%) が「人と違っていたいと思う」と答えた者 (15%) より遙かに多いことが示唆的であるに止まっている。

そこで、社会的比較の対象・相手・機能等を探る基礎的作業として本研究は行なわれた。すなわち、本研究の目的は日常事態における社会的比較の実態を探ることにあるが、その際、それに影響を及ぼしていると考えられる要因2つも併せて検討する。その第一は発達の要因—青年と成人の相違である。青年と成人とでは比較の頻度や機能が異なることを示唆する指摘 (Suls & Mullen, 1982)、あるいは実証的資料が存在する (Suls, 1986; 高田1991) 故である。研究Ⅰは青年 (大学生)、研究Ⅱは成人を対象として、両者の差異を検討する。

検討する要因の第二は、パーソナリティ要因である。社会的比較行動の理解における個人のパーソナリティの重要性は夙に指摘されているが (高田, 1981)、研究Ⅰでは自己意識 (Buss, 1980)、すなわち自分自身に注意を向けやすい性格の如何による社会的比較の様態の相違を検討する。自己概念形成方途としての社会的比較の様態は、他者の眼差しを意識し自分自身に対する注意を高める要因によって影響されることが示唆される故である (高田, 1992)。研究Ⅱでは、個人が認知した自分自身の有能感、すなわちコンピテンス (Harter, 1982) を取り上げる。幼児を対象とした研究において (藤崎・高田, 1990)、社会的比較の頻度とコンピテンスの高さとの間には負の相関がある可能性が示唆されている故である。

研究Ⅰ¹⁾

方法

調査対象者：地方国立大学生105 (男40、女65) 名。講義時間中に、以下の2種の質問紙を配布し記入を求めた。

質問紙：1. 社会的比較の様態調査。日常生活で日頃経験する、(1)社会的比較の頻度、(2)比較の対象、(3)比較の相手、(4)比較の理由と機能、(5)比較の結果、(6)比較に対する評価、(7)比較をめぐる意見・感情、について回答するものである。(1)は4段階評定、(2)~(7)は自由記述によって回答を求めた。

2. 自己意識測定尺度。自己意識尺度の邦訳 (岩淵他, 1981) 23項目で5段階評定である。公的自己意識 (自己の外的・他者顕現的側面に注意を向けやすい傾向)、私的自己意識 (自己の内的・私的側面に注意を向けやすい傾向)、社会的不安 (他者がいる状況で精神的に動揺しやすい傾向) の3側面を測定するものである。

結果と考察

社会的比較の頻度評定：4段階評価における平均値は2.88 ($s.d.=0.78$)、段階2 (ときには比較することもある) 以上を選択し、何等かの頻度で比較をしていることを表明した者は、全体の77%であった。大学生の日常の社会的比較の頻度はかなり高いと言えよう。なお、以下

の社会的比較の様態と自己意識との関係を含め、男女差は認められなかった。

社会的比較の様態：比較の対象、相手、理由と機能、結果、評価、意見・感情に関する自由記述項目への回答は、Masters & Keil (1987) 等を参考にカテゴリー化された。各カテゴリーに該当する記述の頻度をまとめた結果が表1である。

表1 社会的比較の様態

内 容	頻 数 (%)	内 容	頻 数 (%)
<u>比較の対象</u>		<u>比較の結果</u>	
態度・意見	38(16.0)	(認知的結果)	
能力	42(17.7)	自己概念形成・変化	16(9.6)
性格	38(16.0)	態度変化	9(5.4)
容姿・外見	56(23.6)	他者理解	9(5.4)
行動	24(10.1)	不明確さの拡大	3(1.8)
パフォーマンス・結果	15(6.3)	(行動の結果)	
生き方・生活態度	10(4.2)	自己向上努力	49(29.5)
将来・目指す方向	5(2.1)	努力の放棄	5(3.0)
その他	9(3.8)	同調・模倣	8(4.8)
<u>比較の相手</u>		(感情的結果)	
友人	43(34.1)	優越感	14(8.4)
類似他者	17(13.5)	劣等感	34(20.5)
非類似他者	18(14.3)	他者への嫉妬	3(1.8)
周囲の他者	31(24.6)	影響なし	13(7.8)
不特定多数	5(1.6)	その他	3(1.8)
架空の人物	2(1.6)	<u>比較に対する評価</u>	
誰とでも	5(4.0)	肯定的評価	47(52.8)
その他	5(4.0)	否定的評価	34(38.2)
<u>比較の理由・機能</u>		中性的評価	
自己評価	42(32.1)	8(9.0)	
他者評価	11(8.4)	<u>比較を巡る意見・感情</u>	
不確実性の低減	14(10.7)	独自性の覚醒	10(17.9)
自己高揚	33(25.2)	他者の眼差し意識覚醒	4(7.1)
自己卑下	12(9.2)	否定的感情の生起	15(26.8)
関係への配慮	15(11.5)	今後の比較の示唆	17(30.4)
理由無し・自然	3(2.3)	何も感じない	3(5.4)
		その他	7(12.5)

これらのうち、比較の対象では「態度・意見」「能力」「性格」、比較の相手では「類似他者」、比較の理由・機能では「自己評価（“自分の位置を知る”“自分についての公正な知識を得る”等）」「不確実性の低減（“自分に自信がなく不安”“自分の状態が不明確”等）」「自己高揚（“優越感を得る”“自分自身を向上させる”等）」、比較の結果では「自己概念形成・変化」「態度変化」「自己向上努力」「優越感」等は、Festingerの理論あるいはそこから派生した諸研究で論じられているものである。その意味で、社会比較過程理論が日常生活における自他の比較のある部分に対応していることは事実であろう。

一方、社会的比較過程理論で直接扱われていないものも多く含まれている。比較の対象では「容姿・外見」「生き方・生活態度」「将来・目指す方向」等であり、それらは自己概念を構成する内容であると従来指摘されているものである。比較の相手では「友人」や「周囲の他者」の頻度が相対的に高い。これは、日常的には類似・非類似を基準に選択的に比較が行なわれるのでは必ずしもなく、その場で利用可能な他者との比較がなされていることを示唆する。比較の理由・機能については、「自己卑下」と「関係への配慮」が注目される。前者は、日本大学生を対象とした実験（高田，1987）で見られた自己高揚とは対照的な機能である。具体的には「劣等感を確かめる」等の記述である。後者は、Ruble & Frey(1987)が幼児の社会的比較

に顕著なことを指摘する関係維持機能—自他の類似性を基盤に他者との親密な関係を作り上げたり維持したりする—に対応しており、具体的には“周囲からよく思われたい”、“周囲との和を保つ”、“他者の眼が気になる”等の理由である。

社会的比較と自己意識との関係：自己意識尺度項目の因子分析（主因子解・パリティマックス回転）の結果、公的自己意識、私的自己意識、社会的不安の3側面にはば対応した因子を得た。それに基づき、公的自己意識因子と私的自己意識因子に含まれる項目の平均値をそれぞれ公的自己意識得点と私的自己意識得点とし、その中央値によってそれぞれ高群と低群とに調査対象者を分割した。各群ごとに比較頻度評定と、対象、理由・機能、結果、意見・感情における各カテゴリーに該当する記述があった割合を示したのが表2（公的自己意識）および表3（私的自己意識）である。なお、これらの表では、自己意識得点による有意な差が見られないカテゴリーは記載を省いた。

表2 公的自己意識の高低による社会的比較の頻度^aと様態^bの相違

	比較頻度	比較の対象		比較の相手 友人	比較の理由・機能		比較の結果			比較を巡る 意見・感情 否定的感情
		態度・意見	容姿・外見		自己評価	不確実性 低減	態度変化	自己向上 努力	劣等感	
公的自己意識 高群 (n=50)	3.00	34.0	56.0	54.0	46.0	22.0	8.0	54.0	44.0	24.0
低群 (n=41)	2.69	43.9	31.7	31.7	31.7	4.9	7.3	43.9	24.4	4.9
検定結果 ^c	F=4.43*	$\chi^2=0.93$	$\chi^2=5.37^*$	$\chi^2=4.55^*$	$\chi^2=1.93$	$\chi^2=5.39^*$	$\chi^2=0.02$	$\chi^2=0.92$	$\chi^2=3.80^*$	$\chi^2=6.33^{**}$

^a数値は4段階尺度上の評定値（最高4、最低1） ^b数値は該当する項目を選択した者の割合 ^{**}p<.01 ^{*}p<.05 [†]p<.10

表3 私的自己意識の高低による社会的比較の頻度^aと様態^bの相違

	比較頻度	比較の対象		比較の相手 友人	比較の理由・機能		比較の結果			比較を巡る 意見・感情 否定的感情
		態度・意見	容姿・外見		自己評価	不確実性 低減	態度変化	自己向上 努力	劣等感	
私的自己意識 高群 (n=46)	2.90	50.0	39.1	52.2	50.0	17.4	15.2	58.7	41.3	13.0
低群 (n=45)	2.83	26.7	51.1	35.6	28.9	11.1	0.0	40.0	28.9	17.8
検定結果 ^c	F=0.21	$\chi^2=5.23^*$	$\chi^2=1.32$	$\chi^2=2.55$	$\chi^2=4.24^*$	$\chi^2=0.73$	$\chi^2=7.41^{**}$	$\chi^2=3.18^†$	$\chi^2=1.54$	$\chi^2=0.39$

^a数値は4段階尺度上の評定値（最高4、最低1） ^b数値は該当する項目を選択した者の割合 ^{**}p<.01 ^{*}p<.05 [†]p<.10

比較頻度評定に関しては、2（公的自己意識の高低）×2（性別）分散分析によれば、公的自己意識の高い者は比較の頻度が有意に多い（F(1,90)=4.43 p<.05）。他方、私的自己意識に関しては比較頻度の差は見られなかった。比較の様態については、 χ^2 検定（p<.05）の結果、公的自己意識高群は低群に比し、容姿・外見の比較、友人との比較、不確実性低減のための比較、比較による劣等感、比較に対する否定的感情が記述された割合が有意に多かった。一方、私的自己意識高群では、態度・意見の比較、自己評価のための比較、比較による態度変化、同じく自己向上努力の記述が多かった。

すなわち、他者の眼よりも自己の内部に注意が集中しがちな私的自己意識高群では、自己の内的属性に着目してそれを明確にし向上させようとする方向の比較が顕著である。それに対し

て、他者から見た自己を意識する傾向の強い公的自己意識高群は、他者との比較頻度が高い一方、その比較の様態は、自己の外顕的特性に焦点があてられ不確実性低減のために周囲の他者に依存する傾向が認められる。

研究II

方法

調査対象者：国立大学附属幼稚園児の両親合計334（母親170、父親164）名。平均年齢は35.0歳である。園児を通じて家庭に配布し、後日回収した。

質問紙：1. 社会的比較の様態調査。比較頻度評定は研究Iと同様の4段階評定である。比較の相手、比較の対象、比較の理由・機能に関しては、研究Iでの大学生の自由記述をコード化した結果に基づき、表4に示した多項目選択で回答を求めた。このうち、大学生の自由記述では「関係への配慮」としてまとめた内容を「他者の目の意識」と「他者への同調」とに分離した。研究Iに含まれている比較の結果、比較に対する評価、比較をめぐる意見・感情についての項目は、調査実施の制約上これを省略した。

2. コンピテンス測定尺度。Messer & Harter (1986)による成人用コンピテンス測定尺度の日本語版（藤崎他, 1988）を用いた。これはコンピテンスの11の下位領域（各4項目）と全体的自己価値（6項目）の合計50項目から構成されている。コンピテンスの下位領域は、(1)一般的対人関係、(2)仕事、(3)養育、(4)運動、(5)容姿、(6)他者への便宜供与、(7)道徳、(8)家事、(9)親密な対人関係、(10)知的能力、(11)ユーモア、から構成され、強制選択に基づく4段階評定である。

結果と考察

社会的比較の頻度評定：4段階評価における平均値は、男性（父親）は2.52 ($s.d.=0.79$)、女性（母親）は2.62 ($s.d.=0.68$)であり、両者間に有意差はない ($t=1.26$ $df=332$)。一方、両者をあわせた全体の平均値は2.56 ($s.d.=0.74$)であって、青年（平均2.88）に比べて有意 ($t=3.75$ $df=437$ $p<.001$) に低い。また、段階2（ときには比較することもある）以上を選択した者の合計は、全体の60%であった。すなわち、Suls & Mullen (1982) 等が指摘するように、成人の比較頻度は青年（大学生）に比べて相対的に低い、頻度の水準自体はさして低いとは言えない。これは先行研究（高田, 1991）と一致するとともに、富国生命（1991）による調査と通じる結果でもある。

社会的比較の様態：表4に示すように、比較の対象では「態度・意見」「才能・能力」「性格」、相手では「同年齢の他者」「同性の他者」「周囲の他者」、理由では「自己評価」「不確実性の低減」「他者の眼の意識」等が相対的に多く選択されている。これらの傾向は青年の場合と同様であるが、比較の対象で「容姿・外見」が少なく「行動」「生き方」が多い点、相手では「友人」が相対的に少ない点、理由では「自己高揚」が少なく「他者評価（“他人の状況に関心がある”等）」が多い点は青年と異なる。

これらの成人に特徴的な比較のうち、社会的比較過程理論では扱われていない内容は、比較の対象では「行動」「生き方」、比較の相手では「周囲の他者」、比較の機能では「他者の眼の意識」「他者評価」である。したがって、わが国の一般成人が日常行なっている自他の比較には、社会的比較過程理論が説く自分自身の内的特性の自己評価や自己高揚という機能のほかに、外顕的行為を対象とし他者を基準とした他者指向的な機能が含まれていることが示唆される。

表4 社会的比較の様態（成人）

	内 容	各項目が選択された割合		
		全体	男性	女性
比較の 対象	態度・意見	77.2	73.6	80.6
	才能・能力	41.4	50.9	32.4
	性格	38.4	37.4	39.4
	容姿・外見	17.1	9.2	24.7
	行動	42.9	63.2	48.4
	生活状況	21.3	18.4	24.1
	生き方	37.8	39.9	35.9
	その他	0.6	0.0	1.2
	比較の 相手	同年齢の他者	59.8	64.4
同性他者		40.5	33.1	47.6
非類似他者		14.4	17.8	11.2
友人		39.6	30.1	48.4
同僚		39.3	34.4	44.1
架空の人物		4.5	3.7	5.3
理想とする人		14.4	16.6	12.4
平均・常識		22.8	16.6	28.8
その他		3.0	4.9	1.2
比較の 理由・ 機能	自己評価	64.8	71.2	58.6
	他者評価	25.3	22.7	27.8
	不確実性の低減	32.9	24.5	40.9
	自己高揚	4.8	5.5	4.1
	自己卑下	7.5	6.7	8.3
	関係への配慮	5.1	3.7	6.5
	他者の眼の意識	21.4	22.7	20.1
	その他	13.0	16.0	10.1

社会的比較とコンピテンスとの関係：測定尺度を構成する下位領域が実際に測定された構造に対応しているかを検討するため、本研究の資料を用いて因子分析を行なった研究によれば（藤崎・高田，1992）、ほぼ原尺度の下位領域にそった因子が抽出されている。そこで、各下位尺度をそのまま用いても概ね妥当であると判断し、それを構成する質問項目の評定値の平均をその下位領域の評定値とした。

各領域のコンピテンスと社会的比較の頻度・様態との関係を検討するため、コンピテンスの11の下位領域と全体的自己評価の計12の側面のそれぞれについて、その平均値に基づいて上位群と下位群とに調査対象者を分割した。なお、平均値の算出と上位・下位群への分割は男女別に行なった。各平均値（上段）と標準偏差（下段）は表5に示すとおりである。

表5 コンピテンスの下位領域と全体的自己評価の平均値

	一般的 対人関係	仕事	学習	運動	容姿	他者への 便宜供与	道徳	家事	親密な 対人関係	知的 能力	ユーモア	全体的 自己評価
男性 n=164	2.76 (0.48)	2.99 (0.54)	2.78 (0.41)	2.73 (0.60)	2.48 (0.61)	2.83 (0.49)	2.68 (0.42)	2.39 (0.49)	2.74 (0.55)	2.47 (0.52)	2.72 (0.52)	2.79 (0.42)
女性 n=170	2.70 (0.47)	2.66 (0.50)	2.99 (0.40)	2.37 (0.63)	2.25 (0.61)	2.72 (0.46)	2.68 (0.33)	2.52 (0.58)	2.66 (0.51)	2.18 (0.48)	2.50 (0.55)	2.58 (0.41)

つぎに比較頻度評定について12の側面ごとに、2（コンピテンス上位群・下位群）×2（性別）分散分析を実施した。他者への便宜供与の側面においてコンピテンスの主効果が周辺の有意水準で見られ（ $F(1,328)=3.46$ $p<.07$ ）、上位群（ $m=2.49$ $s.d=0.56$ ）は下位群（ $m=2.35$ $s.d=0.68$ ）より比較頻度が多かった。すなわち、他者への便宜供与に長けていると自認する者は、比較頻度が多い傾向があると言える。これ以外の下位領域では、コンピテンスの高低による比較頻度の差は見られなかった³⁾。

表6 社会的比較の様態とコンピテンス・全体的自己価値との関係

	一時的 対人関係	仕事	養育	運動	娯楽	他者への 便宜供与	運送	家事	親密な 対人関係	知的 能力	ユーモア	全体的 自己価値
比較の 対象	態度・意見 才能・能力 性格容姿・外見 行動生活条件 生き方											
比較の 相手	同年齢の他者 同性の他者 非類似他者 友人 周囲の他人 架空理想平均 他人とする人 常態											
比較の 理由機能	自己評価 他者評価の低減 不確実性の低減 自己高揚 自己卑下 関係への配慮											

*は p < .05 (**)は p < .10 で、コンピテンス・自己価値上位群は下位群よりも当該カテゴリーの選択が多い。

さらに社会的比較の様態との関連については、各下位領域のコンピテンス・全体的自己価値ごとに、コンピテンス上位・下位と各カテゴリーの選択の有無の2×2分割表に基づき、 χ^2 検定を行なった。その結果の一覧が表6である。有意な相違が見られた組み合わせのすべてにおいて、コンピテンス下位群は上位群よりも該当するカテゴリーの選択が多い。とりわけ、養育を除くすべてのコンピテンス下位領域の下位群では、比較の機能として「不確実性の低減」を選択した者が多く見られる。また、「自己卑下」を選択した者も、比較的多くの領域にわたる下位群に共通して見られる。すなわち、自分自身の有能感が低い者は、自己の内的属性に注目する自己評価や自己高揚とは異なった、消極的な機能を帯びた比較を行なっている可能性が示唆される。

全体的考察

高田(1992)は、従来の社会的比較研究の成果を総括し、他者を参照して自己を認識するメカニズムとして社会的比較を一般的に位置づけようとする、大略以下のような議論を展開している。

まず社会的比較の主要機能は以下の三つにまとめることができる。

1. 自己評価 (self-evaluation) : 自己認識の内容を構成するさまざまな特性についての不確かさを解消し、正確な自己認識を得る機能。Festinger理論の中心として論じられている部分である。
2. 自己高揚 (self-enhancement) : 自尊感情、すなわち、自己に対する価値づけを防衛し、維持し、向上する機能。Latané (1966) 以来、社会的比較の第二の機能として着目され知見が集積されている。
3. 自己融合 (self-harmonization)⁹⁾ : 社会的相互作用において他者を基準として、適切で有効な行動や結果あるいは人間関係を得る機能。Ruble (1983) 等により、幼児の社会的比較の中心的機能とされているが、必ずしも幼児に限られない一般的機能と考えられる。

これらの各機能を持つ比較の動機背景として、適応の圧力と快楽の圧力 (Brickman & Bulman, 1977) が考えられる。社会に適応し自己の状態を改善する情報源として他者との比較を促進する圧力が前者であり、正確な自己評価に伴う苦痛や不快を避けようとする圧力が後

者であるが、自己評価の機能を持つ社会的比較には適応的圧力が、自己高揚および自己融合の機能を持つ社会的比較には快楽的圧力が、それぞれ強く作用していると言える。

さらに、自己認識のメカニズムとして社会的比較を位置づける観点からは、社会的比較の三つの機能に対応した自己認識の三つの形態を考えることができる。

1. 即時的自己認識：他者から区別された存在としての自己を、事実即して個人が冷静かつ知的に認識する形態。社会的比較の自己評価機能に対応する。
2. 快楽的自己認識・自己高揚：他者との社会的関係の中で肯定的な自己感情を得るため、個人を他者から図 (figure) として際立たせることによって、自己を快楽的に認識する形態。社会的比較の自己高揚機能に対応する。
3. 快楽的自己認識・自己融合：他者との社会的関係の中で肯定的な自己感情を得るため、個人を周囲の他者の中に地 (ground) として溶け込ませることによって、自己を快楽的に認識する形態。社会的比較の自己融合機能に対応する。

すなわち、快楽的圧力に従って自己を把握するには二つの方途があるが、従来の諸説では両者を概念的に区別することなく、社会的比較の自己高揚機能に基づく前者のみが強調されている。しかしながら、専ら他者指向的に自他の類似性を保つことによる、後者の如き自己融合的な自己の快楽的把握もあり得ると考えられる。また、自己認識の基本的方向として、即時的自己認識と快楽的自己認識のいずれが相対的に優勢となるかは、個人が周囲の他者をどれくらい意識するかによって決定される。

一方、本研究の結果の要点は以下の三点にまとめられるが、それらは上記の議論の枠組みに沿って解釈可能であると思われる。すなわち、

1. 日常事態での比較の様態に関して、その対象、相手、機能は社会的比較過程理論が論究する内容を含んでいる反面、それを越える部分も包含することが見出されたこと。就中、自己評価や自己高揚の如き従来から論じられているものに加えて、「関係への配慮」あるいは「他者の眼の意識」という、他者指向的な機能が認められたこと。これは、上記した社会的比較の自己融合機能に対応していると考えられる。

2. 比較の過程に影響を及ぼす個人のパーソナリティ要因が見出されたこと。すなわち、他者から見た自己を意識する傾向の強い公的自己意識の高い者、他者への便宜供与に長けていると自認する者は比較頻度が高いこと、また、公的自己意識の高い者やコンピテンスの低い者は、不確実性低減のために周囲の他者に依存する傾向が認められたこと。これは、これらの者に優勢な自己認識の基本的方向が自己評価ではなく、快楽的自己認識にある可能性を示唆する。反面、私的自己意識が高い者の基本的方向が即時的自己認識であることも考えられる。

3. 大学生および成人が日常事態で行なう社会的比較の頻度は、総じてかなり高いこと。上記の考察や富国生命 (1991) による調査の結果も併せて考慮するなら、日本文化における自他を比較する機会の多さは、自己評価や自己高揚の機能の反映では必ずしもなく、自己融合的比較に基づく快楽的・自己融合的自己認識の優勢を示す可能性が示唆される。

以上、必ずしも既存の理論あるいは方法に縛られずに、日常事態における自他の比較の様態を探ることが、社会的比較の過程の一般的・総合的な理解に有益であることを、本研究はある程度示し得たと言えよう。しかしながら、本研究の限界の一つは、専ら調査対象者の回想報告によっていることである。最近、Wheeler & Miyake (1992) は事象随伴自己記録法 (event-contingent self-recording method) を用い、2週間にわたる調査対象者の比較体験を連続的に記録し、日常生活における社会的比較の様相について、本研究では扱わなかった比較の方向を軸とした興味深い知見を得ている。今後は、そのような方法上の改善を図った上で、わが国の社会における比較の様態に関して、さらに知見を集積する必要があるだろう。

引用文献

- Brickman, P. & Bulman, R. 1977 Pressure and pain in social comparison. In J. Suls & R. Miller(Eds.) *Social Comparison Processes*. Washington: Hemisphere. Pp.149-186.
- Buss, A.H. 1980 *Self-consciousness and Social Anxiety*. San Francisco: Freeman.
- Deutsch, M. & Krauss, R.M. 1965 *Theories in Social Psychology*. New York: Basic Books.
- Festinger, L. 1954 A theory of social comparison processes. *Human Relations*, 7, 117-140.
- 藤崎眞知代・古澤頼雄・赤津純子 1988 幼児期より思春期に至る横断的研究(5) 日本心理学会第52回大会発表論文集, 102.
- 藤崎眞知代・高田利武 1990 子どもの自己形成に及ぼす社会的比較の影響 —(1)幼児の面接資料の分析— 日本心理学会第54回大会発表論文集, 50.
- 藤崎眞知代・高田利武 1992 児童期から成人期にかけてのコンピテンスの発達的变化 —横断的資料を通じて— 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編, 41, 313-327.
- 富国生命 1991. サラリーマンの“群がり度” —集団志向・個人志向を探る—
- Guot, J.M. 1978 Some comments on social comparison processes. *Journal for the Theory of Social Behaviour*, 8, 29-43.
- Harter, S. 1982 The perceived competence scale for children. *Child Development*, 53, 87-97.
- 岩淵千明・田淵創・中里活明・田中国夫 1981 自己意識についての研究 日本社会心理学会第22回大会発表論文集, 37-38.
- Latané, B. 1966 Studies in social comparison: Introduction and overview. *Journal of Experimental Social Psychology*, Supplement 1, 1-5.
- Masters, J.C. & Keil, L.J. 1987 Generic comparison processes in human judgement and behavior. In J.C. Masters & W.P. Smith (Eds.) *Social Comparison, Social Justice, and Relative Deprivation*. Hillsdale: Lawrence Erlbaum Associates. Pp.11-54.
- Masser, B., & Harter, S. 1986 *Manual for the adult self-perception profile*. Denver: University of Denver.
- Ruble, D. 1983 The development of social comparison processes and their role in achievement-related self-socialization. In E. Higgins, D. Ruble & W. Hartup (Eds.) *Social Cognition and Social Development*. Cambridge: Cambridge University Press. Pp.134-157.
- Ruble, D. & Frey, K. 1987 Social comparison and self evaluation in classroom: Developmental changes in knowledge and function. In J.C. Masters & W.P. Smith (Eds.) *Social Comparison, Social Justice, and Deprivation*. Hillsdale: Lawrence Erlbaum Associates. Pp.11-54.
- Suls, J. 1986 Comparison processes in relative deprivation: A life-span analysis. In M. Olson, C.P. Herman, & M.P. Zanna(Eds.) *Relative deprivation and social comparison*. Hillsdale: Lawrence Erlbaum Associates. Pp.95-116.
- Suls, J. & Mullen, B. 1982 From the cradle to the grave: Comparison and self-evaluation across the life-span. In J. Suls (Ed.) *Psychological Perspectives on the Self*, Vol. 1. Hillsdale: Lawrence Erlbaum Associates. Pp.97-125.
- 高田利武 1981 対人恐怖と社会的比較 年報社会心理学, 22, 201-218.
- 高田利武 1987 社会的比較による自己評価における自己卑下の傾向 実験社会心理学, 27, 27-36.
- 高田利武 1990 日常場面での社会的比較の様態 —大学生の場合— 日本心理学会第54回大会発表論文集, 201.
- 高田利武 1991 社会的比較：その発達過程 三隅二不二・木下富雄(編)現代社会心理学の発展II ナカニシヤ

- 出版 Pp.96-119.
- 高田利武 1992 他者と比べる自分 サイエンス社
- Tesser, A. & Campbell, J. 1983 Self-definition and self-evaluation maintenance. In J. Suls and A. Greenwald(Eds.) *Psychological Perspectives on the Self*. Vol.2. Hillsdale: Lawrence Erlbaum Associates. Pp.1-31.
- Wheeler, L. & Miyake, K. 1992 Social comparison in everyday life. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, 760-773.
- Wills, T. 1981 Downward comparison principles in social psychology. *Psychological Bulletin*, 90, 245-271.
- Wood, J.V. & Taylor, K.L. 1991 Serving self-relevant goals through social comparison. In J. Suls & T.A. Wills(Eds.) *Social Comparison: Contemporary Theory and Research*. Hillsdale: Lawrence Erlbaum Associates. Pp.23-49.

注

- 1)本研究は日本心理学会第54回大会において、その概要を発表したものである(高田, 1990)。
- 2)一般的対人関係 ($F(1,328)=5.18$ $p<.03$)、容姿 ($F(1,328)=3.59$ $p<.06$) の下位領域で有意なコンピテンス×性別の交互作用があり、男性ではコンピテンス上位群は比較頻度が多いのに対し、女性ではコンピテンス下位群の方が比較頻度が多い傾向が認められた。さらに、性別の主効果はいずれの下位領域においても見られなかった。
- 3)高田(1992)においては、Ruble(1983)に従って規範修得・関係維持機能と称されているが、ここでは対応する自己認識の基本方向に即して、自己融合機能と呼ぶこととする。また、最近Wood & Taylor(1991)は、社会的比較の基本的機能を、自己評価(self-evaluation)、自己向上(self-improvement)、自己高揚(self-enhancement)の三つに分類している。しかしながら、後二者は高田(1992)が自己高揚機能の下位形態であるとしている上方比較(upward comparison)および下方比較(downward comparison)に対応するものであって、従来の分析枠組みの域を出ていないと思われる。